

解深密經の成立構造の研究 (二)

西 尾 京 雄

第三章 正宗分の成立構造

第一節 勝義諦相品の構造について

第一項 勝義四品開顯の契機

根本無分別智の覺證の位態より法界等流して衆生界悟入の方便のために言說施設せられるのであるが、その施設を見ざる涅槃智の面を説くものが勝義諦の教説であり、法住智の面を説くものが世俗諦の説示である。この勝義、世俗の二諦の教説を内容とする解深密經正宗分の成立構造を究明せんとするのであるが、先づ、勝義諦の四品、即ち、第一不可言無二品・第二過覺觀境品・第三過一異品・第四一味品等の教説より檢尋しよう。

扱て、勝義諦の教説について無着疏には次の如く述べてゐる。

勝義の五相を説示するは、即ち、智慧波羅蜜品の中に、不可思議(*acintya*, *bsam-gyis-mi-khyab-pa*)、無比(*atu-*

lya, *mtshubs-pa med-pa*)、無量(*aprameya*, *dpag-tur-med-pa*)、無數(*asankhyeya*, *gras-med-pa*)、無等等(*asamasama*, *mi-mñam-pa dan inñam-pa*)の義を出すものと次第するなり。^①

この疏の指示するが如くであるならば、解深密經勝義諦教説の五相開顯の契機は般若經の説相に基いてゐるといふことである。小品般若經、相無相品第十三に、須菩提自佛言、世尊、般若波羅蜜爲大事出、般若波羅蜜爲不可思議事不可稱事不可量事無等等事故出^②と出で、此等の四句について經典自ら次の如く註解する。

- 一、不可思議 滅諸籌量故、
- 二、不可稱 滅諸稱故、
- 三、不可量 過諸量故^③
- 四、無等等 滅等等故

この四句は疏に於て無數が加へられて五句と成つてゐるが、大般若經に於て無數量とせられるが如く第三不可量の中に合説せられるものであらう。元來この四句は不可思議を標句とし不可稱等と轉釋せられるものであらうから五句となり無量句と轉開すべきであらう。瑜伽論卷七五(大正・三〇・七・一三下)には勝義諦を離名言相・無二相・超過尋所行相・超過諸法一異性相・遍一切一味相の五相とするが、この中、離言相は各相にあるが爲に解深蜜經では無二相と一處に合説すると述べてゐる。

かくの如く、般若經に於ては諸法の般若波羅蜜の不見相を四句或は五句として轉釋することが慣習であつたのでもあらうが、解深蜜經に於ては勝義諦の五相として廣説したものであるといふ傳承は領受してよいであらう。それ故に勝義諦教説の網格は般若經に源由すると見ることが出来よう。

註① 拙著、佛地經論之研究四一頁

- ② 小品般若經卷五(大正・八・五五九上)、道行般若不可計品第十一(大正・八・四五〇下)、太明度不可計品(大正・八・四九二中)等は四句によつて説くが、佛母出生經不思議品第十三(大正・八・六三二中)には五句による。次の如し。

此般若波羅蜜多最上甚深爲大事・故出、爲不可思議事・不可稱事・不可量事・不可數事無等等事故出。

大品般若、問相品第四十九(大正・八・三二七下)は四句。

- ③ 小品般若經卷五(大正・八・五五九中)、但し、無等等の解釋を見出さないのが大般若經、卷五一・不思議品(大正・七・六〇八上)によつて補ふた。そこには次の如く説く。

不可思議 思議滅故

不可稱量 稱量滅故

無數量 數量滅故

無等等 等々滅故

第二項 不可言無二品の構想

扱て、般若經の不可思議の句を據處としてその意義を廣説する不可言無二品の教説について、無着疏を釋相の軌範とする解説によれば總じて四義に科文する。その中核心を爲す教説は前二義である。それについて着疏は次の如く大義を説述する。

其等の中、聖教(āgama, iuñ)と覺證(buddhi, rtogs-pa)との無増益と無損減とに於て愚の對治は無二(相)と不可言(相)とを示すなり。②

この釋義は、本品は二段に分れ、第一段は聖教の上よ

り、第二段は覺證の上より増益・損減の愚癡を對治することを説くのであるといふのである。

第一段は聖敎、即ち聞相による徧知の立場より諸法の無増益と無損減とを説かんとするものである。佛は阿舍に於て一切法は無二なり、一切法は無二なりと説き給ふのであるが、その諸法の盡所有性なる一切法とは何であるか、如所有性なる無二とは如何なる意味であるかと徧知せんとするのである。それに對して一切法は有爲と無爲とであると施設して、凡夫が諸法を無と執じて損減するを對治し、次に有爲は有爲に非ず無爲に非ず、無爲も亦無爲に非ず有爲に非ずと施設して、凡夫が施設の如く有と執じて増益するを對治するのである。而して諸法の有爲・無爲の二相を見ざる無二相を證らしめんとするのである。

この「最勝子、言一切法無二、一切法無二」と阿舍に於て二度繰り返す説示の中、前句は法住智より、後句は涅槃智より説かるゝ意趣を持つものであつて、般若經の説示の方規である。この經句は測疏及び解説には處々の經典に説くと言つてゐるが、般若經・華嚴經等の大乘經典

の中にあつては特に般若經を相應せしむべきであらう。③

第二段は一切法の有爲・無爲の上に於て覺證、即ち修相に於ける徧知の立場より三自性を施設して不可言相を説かんとするものである。着疏には、その三自性の施設を次の如く摘示する。

本師の施設の句(aupacūṭikapada)とは、遍計の自性を施設するが故なり。言説は事(vastu, dīśo-po)無きに非ざるなりとは依他を施設するが故なり。離言を現等・覺せりとは圓成實を施設するが故なり。

この疏の指示によつて、經文の解釋を見るに、有爲といひ無爲といふもそれは佛陀の施設したまへる句であり、その句は徧計(parikalpa)より起り、衆生を證らしめんとする言辭(vyavahāra)の所説(abhīlāpa)に過ぎないもので、それが徧計の自性である。それで有爲といひ無爲といふものゝ自體(svabhāva)があるといふことを説くのではない。然しながら説かるべきものである依他の事體(vastu)が無いのではない。その他縁に依つてある事體は聖者の智見(jñānadarśana)によつて不可言(brijo-da med-pa)と等覺せられるものである。その事に於て依他

の自性と離言の等覺に於て圓成實性とを見るのであるから、遍計の自性とを加へて三自性が説かれるとするのである。

かくの如く遍計の自性は有りと執するが如くには有るのではないから無増益となり、依他と圓成との自性は無しと執するが如く無いのではないから無損減となり、諸法の眞實相は増益と損減の二邊を離れた不可言なる中道として覺證せられるものである。

以上は經の文相を追へる一應の解釋であつて、それは後に來る一切法相品・無自性相品等によつて解釋すべきものである。

扱て茲に注意したいことは、從來、この事(yastu)を法性の體事として解釋して來たが爲に勝義諦の教説と世俗諦の教説とが隔歴せる感を懷かしたやうである。俗諦の教説に於て先づ、この依他の事が阿頼耶識として説かれ、三自性の教説は一切法相品並に無自性相品に説かれるのである。解深密經は二諦相依の教説であり、二諦融會して成立してゐる經典であるといふことである。

尙、三自性の教説が間相なる阿含より修相なる覺慧へ

の徧知として開顯されたものであるとせられることは、それが一切法は無二なりと説く般若經並に華嚴經等の教説のある了義的展開であることを知ると同時に、それより、解深密經の佛教思想的意義は一切法相品にあるといふことである。

註① 附錄科判、細科第一品參照

拙著、佛地經論之研究、四一頁

② 小品般若經卷六、又如來如一切法如、皆是一如無二、無別

(大正・八・五六二下)

小品般若經卷二六、須菩提白佛言、世尊是平等爲是有爲法、爲是無爲法、佛言非有爲法、非無爲法、何以故、離有爲法、無爲法不可得、離無爲法、有爲法不可得、須菩提、此二法不合不散無色無形無對一相、所謂無相、佛亦以世諦故說非以第一義(大正・八・四一五中)

佛母出生般若經、卷一二、說諸法相亦無二相(大正・八・

六三二下)

華嚴經、離世間品、解一切法悉無二不轉變、故(大正・九・六三八下)

右同、佛子、菩薩摩訶薩、有十種發金剛心莊、最大乘、何等爲十、菩薩摩訶薩知佛不可得……有爲無爲不可得、菩薩摩訶薩如是住寂靜、住甚深、住寂滅、住無諍、住不可言、住無二、住無等、住眞實、住成就、住解脫、住涅槃、住實際、而不捨一切一切大願……是爲菩薩摩

訶薩第十發金剛心莊嚴大乘(大正・九・六四五下)
 ④ 測疏卷二(續藏三四・四三七右), 講讚六二頁

第三項 超過尋思品の構想

次に、不可稱の句に由來する超過尋思相は前品の凡夫異生と聖者との立場より語られてゐるに對して異生特に外道の立場より論述せられてゐる。稱とは識業の義、即ち尋思であるが、外道のそれが如何なるものであるかを辨別、解明し、以て勝義諦の其等より超過せるものであることを説くのである。

本品も亦四相に分段せられ、その正説は第二段である。第二段は五義の過失の對治を説くのであるが、着疏は次の如く解釋する。

尋思(tarka)に依據して勝義を思惟するなり。諸餘の外道の勝義を悟入せざる五過失あり(dosa)あり。

一 遍求(payesa)の過失、二 増上慢の過失、三 執着(abhiniveśa)の過失、四 施設(prajñapti)の過失、五 諍論(vivada)の過失なり。

此等の中、第一遍求の過失とは、彼等異道の人々は諸法の勝義が諸聖者の自内證(pratyātma-vedanīya)であつ

て、それは内道の教によつてのみ得られるものであるを知らないのである。尋思の所行(egocara)である義は異生が互に展轉する所證(parasparavedanīya)である外道の教を遍く求めるのが過失である。それあるかぎり勝義に悟入することは出来ない。

第二増上慢の過失とは、勝義は止觀雙連の無相の域面(ecara)であるのに對して、世間道によつて心一境のみを得た時、尋思の相を徧執(nimittagrahamaṭṭha)、それを以て勝義を證れりとする増上慢あるをいふ。

第三執着の過失とは、勝義は言説すべからざる境界であるを知らずして、尋思に基いて名・句・文等を安立した言説の境界のみを執着するをいふのである。

第四施設の過失とは、勝義は諸の表示を超過したものであるに對して、尋思は見聞覺知等の表示によつて食作者等を執じて、我・衆生・補特伽羅等有りと施設する。かくの如く我等を施設することによつて勝義を證ることが出来ないから施設の過失といふのである。

第五諍論の過失とは、勝義は諸の諍論を超絶したものであるに對して、尋思に基くものは互に論理と聖教量等

に於て異品を施設し、それを根據とすることによつて自己の立場に隨著し、他の立場に憤怒することより諍論する。かく諍論をことゝするより勝義に悟入し得ない過失となるのである。

これが、本品の法説であるが、般若經勝義の敎説である不可稱なる分別・識業の超絶相が廣説せられてゐるのを知るのである。

註① 科判の細科、第二品參照

第四項 超過一異品の構想

次に不可量の句を依處とする超過一異性相は一類の菩薩、即ち勝解行地の菩薩に對する癡妄の對治のために説かれるのである。これも亦總じて四義は攝せられ、その中第二義癡妄相が正説である。着疏には次の如く釋する。

勝解行地に住する菩薩は二種の癡妄によつて過ちて勝義を如理に思惟せざるなり。即ち假設(*upacāra*, *bhṛāṣa*)の癡妄と正理(*nyāya*, *rigs-pa*)との癡妄なり。^②

この中、第一假設癡妄とは、了義經より以外に聞思修することである。諸法の行相は五蘊等依他の自性の生・住・滅であり、勝義相は諸法の法無我なる圓成の自性である。

この諸法の行相と勝義相との二は了義經の中に於ては、諸行の唯無我・唯無自性のみが勝義相と説かれるのであるから、異と非異とより超過せる相であると説くのである。然るに不了義經にありては、諸法の行相は依他の自性であるに對して勝義は圓成の自性であるから、自性安立の立場より異であると説き、或は依他の清淨なる自性は圓成の自性であるから、本性一の立場より非異と説く。かくの如く經に隨順して聲の如く執する。

この二義は勝義を如理作意しないものであるから假設癡妄といふのである。

第二正理の癡妄とは、因明等の論式を覺知しないことである。その正理に依ることなく勝義について一異を執することの相を、凡聖の迷悟と染淨・共相と法體觀行等の立場より説き、以て一・異の量を超過するものであることを縷説するのである。

註① 科判細科第三品參照

② 無着疏、解深密經 (二)大谷學報第二十二卷第一號八二頁

第五項 一切一味品の構想

終りに無等等の句に由來する一味相は聲聞と獨覺との

境に無くして、少分の菩薩と諸の如來には等しく證せられるものであるが、この勝義諦の一味相についても亦、四段に分別せられ、その第二段が正説である。それについて着疏には、

三種の増上慢を對治して一切一味の相を説くなり。三種の増上慢とは、一、所取の増上慢、二、能取の増上慢、三、相差別の増上慢なり。

此等の中、第一所取の増上慢とは、蘊等の所取の法に於て苦・集・滅・道等の種々相を所得現觀して勝義を證れりと思惟して、自己の了解を他に記別するのが所取の慢といはれるのである。その對治のために諸蘊に於て清淨の所得が勝義と説かれる。清淨の所得とは、五蘊に於て眞如・勝義・法無我なる一切一味の相相應せる正智見にして、その勝義こそ一切に於て種々相無き一味の無相であると説くのである。

第二能取の増上慢とは、諸蘊の中、一蘊の眞如・勝義・法無我を證り、更に又餘の各々の蘊に於て眞如・勝義・法無我を求めることである。觀行の比丘等は一蘊の眞如を正智によつて證る時に餘蘊の一切の眞如をも證る爲に

一々の法に於て一々の覺を求むることがないのである。

第三相差別の増上慢とは、蘊等の諸法は互に異相あるが如く、其等の眞如・勝義・法無我も亦異相ありと思惟することである。その對治のために蘊等の諸法は依他の自性であつて世俗諦施設より自相差別するが、此等の圓成の眞如・勝義・法無我は勝義諦施設より共相無差別なることを説くのである。

かくの如く、圓成の眞如・勝義・法無我は所取事と能取事と相差別事等の一切に於て無差別にして一切一味であるのである。

以上は勝義諦の五相について着疏を基本として略解を施したものであるが、其等の五相は般若經の般若波羅蜜を的示する不可思議等の五句を根本依處として構想せられたものであることは容認せられること、思はれる。諸法の依他なる阿賴耶識の事を覺證せる圓成實性的位態が衆生界によつて種々に徧執せられてゐる。その徧執の種々相を五相の中に統取してゐるが、其等を遮遣、對治して勝義諦相を顯彰してゐるのである。

第二節 心意識相品の構想について

勝義諦教説の機構の根基を知り得たるが如く、世俗諦教説について同様に據處を示すことは出来ない。

今、心意識相品は前説せる勝義諦への覺證の方便のために世俗諦の施設として始めに我々衆生の心意識——依他の事——の事體を顯説するのである。

先づ、廣慧菩薩が「如世尊説於心意識祕密善巧菩薩」と教説を提示して、佛に問ひ奉つて教説が進められる。この問童の經句は今直に指示することは出来ないが恐らく、華嚴經若しくは般若經關係の經典に由來するものであらう。

扱て、本品の内容は科判^①によつて示すが如くであるが、その大要は二段によつて要約せられるやうである。それは問起の經句の意義を問ふ二問によつて知ることが出来るのであつて、その問とは次の如くである。

於心意識祕密善巧菩薩者、

一、齊何名爲於心意識祕密善巧菩薩^上

二、如來齊何施設彼爲於心意識祕密善巧菩薩^下

この二問の中。第一問は法住智(chos kyi lugs ces-pa, dhammaitthiāṇa)^②の立場より善巧であるかを質するもので

^③ある。その法住智とは、實に緣起の法住なる觀察智(sor-tog-paḥi ye-ces, pratyavekṣāṇa-jñāna)であるが、その法住智の境の祕密なる心意識の安立に善巧であるかを問ふものである。

第二問は無分別智の立場より善巧であるかを問ふものである。無分別智とは、轉依によつて攝せられる正智(yan-dag-par-ces-pa)出世間智であるが、その無分別智の境の祕密なる阿賴耶識の還滅安立に善巧であるかを問ふものである。

今、第一問による第一段の所説の中心を爲すは、解説によれば自性の癡妄を對治すると科せられるものであつて、心意識の自體は如何なるものであるかを説くものであるが、測疏の科による解釋と對應して説くであらう。

釋三種不識(二)

初約趣生略明身分生起——廣慧當知、於六趣生

死、彼々有情墮彼々

有情衆中、或在卵生

或生胎生或在濕生

或在化生身分生起

二約種子識・廣辨・受生差別(二)

(辨根等依識生起增長)
初明受生分位差別(三)

一、明三種識成熟……………於中最初一切種子識成熟

二、展轉和合……………展轉和合

三、增長廣大……………增長廣大

(明識依色根等)
二明三種識依二執受

一、標章舉數……………依二執受

二、依數列名……………一者有色諸根及所依執受

二者相名分別言
說戲論習氣執受

三、約界分別……………有色界中具二執受・無色界中不具二種

この科より第一には、有情の六趣に流轉するについて、

胎・卵・濕・化の四生によつて身分の生起する現實を示し、第二にその輪廻の主體たる一切種子心識が結生相續、即ち、如何なる狀態によつて發育して行くのかといふことを説明し、第三はこの一切種子心識が吾々の肉體的並に精神的な生活力の源泉であるといふやうに解釋されるのである。④これが從來一般に解釋せられて來た釋明であらうと考へられるが、今、藏傳解說による解釋を述べざるであらう。それに就て、直に第二段の受生分位差別の經句の解釋を和譯しよう。

一、一切種子心 (sa-bon thams-cad-pa'i sems, sarva-bhaktita) とは、阿頼耶識にして一切の種子がその中に有るが故なり。

二、成熟して (nam-par-smi-n, vipac) とは、かの精血和合の中結生の時に前業の果として成就することなり。

三、展轉(和合)する (hing-ta, pravyt) とは、父母の精血和合の色相 (gzugs kyi nam-pa) あり、其と阿頼耶識とが生處の門 (skye-gnas kyi sgo) より胎に降下して安危を同じくする (grub-pa dan bde-ba gcig-pa,

ekayogakṣema)なり。

四、増大しつゝ (rgyas-cu, vridhim) とは、それが再び相續して展轉するが故なり。

五、長大し (bphel-ba, vridhim) とは、轉識の生起する時なり。

六、廣大となる (yais-par-rgyur-ro, viyatam apadya=te) とは、其等の轉識が習氣を熏習するが故なり。^⑤

この中、先づ、成熟・展轉(和合)について、測疏には兩釋を擧げてゐるが共に胎生學的説明であり、その第二釋は解説の解釋と軌を一にしてゐる。

次に、増長・廣大についても亦兩釋ありて次の如くである。

一、云由三前展轉和合力・故羯羅藍等漸増長位、根大種等増長廣大

一云、由三和合・故名色漸漸増長廣大^⑥

この二釋について、第一釋は未だ心の作用について説き及んでゐない。第二釋は母胎中にあつて未だ六根の具備する程には發育してゐないが、名(精神)と色(肉體)とを有してゐることを説いたものである。

然し、此等の二釋は共に胎内位に於て説いてゐるのであるが、徳龍は何に據つたか明かではないが、講讃には胎外位をも含めてゐる。即ち、

増長廣大者賴耶種子次第現起、賴耶現行能任持胎内五位胎外五位増長廣大也^⑦

と解釋する。

今、解説にありては五「長大し」を以て諸轉識の生起となし、六「廣大となる」を以て諸轉識の習氣を熏習することをいふのであるから、正しく胎外位を含める意である。かゝる觀方よりすれば、この第二段の前經句を以て受生の分位差別を明したものと胎生學的にのみ見ることは適當でなく、一切種子識の受生といふことを發端として種子識の六轉識の熏習に縁る縁起を説いてゐるものであると見るべきである。

次に、種識が生死に結生相續し増長・廣大する性能のある所以について二の執受あると説くのである。

一、有所依の有色根を執受するところ (rtan-dan-bcas-pa=bi dba'i-po gzugs-can len-pa, sādhiḥāna-rūpindriya-up=ādāna)

二、相と名とを分別するために言説を施設する戲論の

習氣を執受する(མཁུ་འཛིན་)(*mtshan-ma dan min nam-par-rto-g-pa la tha-sñad ḥdags-paḥi spros-paḥi bag-chags len-p-a, nimita-dāma-vikalpa-vyavahāra-prapañca-vāsana-upā-dāna*)

此等の二種の執受とは、阿頼耶識が一方五色根の所依であり、衆生が執じて自體となす有執受蘊(*zin-paḥi ph-es-can du bgrañ-ba*)—を執受すると同時に他方、有爲の行相或は諸法の名等を分別して、我等を分別し、色等を分別し以て、自體ありと執することによつて生じたる習氣を執受することをいふのである。阿頼耶識はこの二執受、即ち取に因つて一切の可能性、即ち種子なるものが藏せられてゐるといふのである。

此等の第一段受生の分位差別を明すものと第二段種識の二執受に依るを明すものとの二段について、第二段は第一段の根據を釋すものであるとのみ見るが爲に、その二種の取に因る一切種子心なる阿頼耶識が増長・廣大するについて、専ら、胎生學的に説明することゝなるやう

である。

然るに測疏に於ても第一段を以て、根等が識に依つて生起・増長することを明すものであるとし、第二段を以て識が色根等に依ることを明すものであると細註してゐるのである。これを以て見れば第二段を以て第一段の根據とのみ考ふべきものでなく、色根と識・識と色根との相依・相資の關係を具體的に説示してゐるのである。

一切種子心が習氣を執受するのであるが、その習氣とは遍計所執性に執着する六轉識の熏習なのであつて、それは胎内位に於てでなく胎外位に於て得られるものであらうが、この説相と對應して第一段の長大し、廣大となるを以て六轉識の生起と六轉識の習氣熏習することゝを説いたものであると解釋する藏傳解深密經解説の釋は經の當意を得たものであるといふことが出来る。

かくの如く阿頼耶識の自性を説き、ついで種子識の阿陀那等と説かれる名の差別によつて其等の相を明し、その名と相應せる業用の差別、六轉識の種識と俱轉することとを暴流喩と明鏡喩とによつて説き、最後に六轉識による施設等は雜染分の差別であるから世俗の差別といはれ

るのであるが、その施設の本義は諸法は緣起によつて住するといふ智見、即ち、法住智によつて施設し建立したものであるといふことを説いて第一大段、即ち第一問を終るのである。

然し、かくの如き法住智によつて施設せられた差別の様相をのみ悟解したとしても、其はそれだけでは心意識の祕密に善巧であるとは言ふことは出来ない。世俗の施設の差別を見ない勝義の差別を達解しなくては心意識の祕密に眞に善巧であるとは言はれないのである。

阿頼耶識の一切種子心識なる自性、並に阿陀那等の差別を安立することは遍計の自性であつて、其等は相無自性であるから空華の如く畢竟して無なるものであり、遍計の言説を施設する根基である阿頼耶識は緣起の自性で、他の因縁によつて生起することより生無自性にして本來幻事の如く、この阿頼耶識の緣起に於て遍計の自性の遮遣せる眞如は圓成自性であり、勝義無自性にして本性虚空の如く、それは無分別の行境なるものである。この内證の世界を勝義差別といふのである。それを經には次の如く説く。

廣慧、若諸菩薩於內各別如實不見阿陀那不見阿陀那識……不見意法及意識是名勝義善巧

この經句を三性三無性の思想背景を以て解釋し、その勝義差別なる圓成實性的位態を顯示することは行き過ぎの如く思はれるが、それは勝義諦不可言無二品の教説によりても顯示せられるやうである。即ち、

何等爲事謂諸聖者以聖智聖見離名言故現等覺^⑤

と説く。この教説については既に關説したが、阿頼耶識なる事を根基として徧計所執の言辭施設となるのであるが、聖者は正智を以てその施設の名言を離れ、以て等覺としての勝義なる圓成實性が顯現するといふことである。かの勝義差別の教説に於て、「不見」とは、「正智を以て眞如を見る時見ず」^⑥といはるゝやうに、施設の名言を離れる、即ち無分別智が開顯されて勝義の差別が見られるのである。これによつて、心意識相品の説相は勝義諦の教説と對應して説かれてゐると見ることが出来るのである。

かくの如く、無分別智を以て種子心識等の還滅安立を得て初めて心意識の一切に善巧なる菩薩といはれる。

終りに、この心意識相品の教説について據處となつたものが無いであらうか。それについて故佐々木教授の著、攝大乘論の中に、その論の所依となれる經典を論じて居られるが、その中に華嚴經を注意し引用せられる中、四十華嚴、第九圓滿多聞 (Cravamaṇḍala) 城、第十三善知識、根自在童子教誡の經文を引用してゐる。その著に引用せられる他の部分も亦、心意識相品と連關するやうであるから、經典より引用しよう。善財童子が根自在主に教誡を求めたるに對して次の如く説くのである。

善男子、我昔曾於文殊師子童子所修學算數印相等法、即得悟入一切工巧神通智門、善男子、我因此故、知諸世間所有聲論內明因明醫方明等文字算數契印取與種々智論……如是乃至眞俗二諦皆悉能知

……

亦知自他過去受身中有分位、入胎住胎經生差別、亦知未來一切衆生死此生彼死彼生此、從此處死還生於此、從此處死還生於此、亦知過現一切諸佛差別法門……

治內煩惱何等名內身煩惱有因緣一謂眼根

攝受色境、由無始取著習氣、由彼識自性本性、四於色境作意希望、由此四種因緣力故、藏識轉變、識浪生、譬如瀑流相續不斷、善男子、如眼識起一切根識、微塵毛孔俱時出生亦復如是。譬如明鏡頓現衆像、諸識亦爾、或時頓現、善男子、譬如猛風吹大海水、波浪不停、由境界風颺靜心海起識波浪相續不斷、因緣相作不相捨離、不異、如水與波、由業生相深起繫縛不能了知色等自性、意識身轉、彼阿賴耶終不自言我生七識、七識不言從賴耶生、但由自心執取境相分別而生、如是甚深阿賴耶行相微細究竟邊際、唯諸如來住地菩薩之所通達、愚法聲聞及辟支佛、凡夫外道悉不能知^①

この華嚴經の經説に於て、二諦を知ること、指示すること、自他の過去・未來の受身差別を知ること、藏識轉變の四種因縁を擧示すること、賴耶と轉識との俱轉、瀑流と明鏡との二喩、甚深賴耶を説く結語等を説く説相と次第とは心意識相品のそれとよく相應することを知るのである。更に故佐々木教授も指摘する如く十地經の「三界虛妄但是心作、十二緣分是皆心心」(大正・一〇・五五三

上)等を中心とする因縁集法の十種順逆の觀を説く教説を見る時本經と華嚴經との親縁關係を認めざるを得ない。殊に序品の成立構造を論述せる際に見たるが如く佛德圓滿の二十一句は離世間品の佛德のそれをそのまゝ取り用ひ、後述するであらう如く地波、羅蜜多品は十地經によつて教説が開かれ、如來成所作事品の構想は如來性起品を基本とすることに想到すれば、本品も亦華嚴經に依ると思はれる。

註① 科判細科、第五品參照

- ② 法住智、その梵語をラモート氏は *Sandhirimocana-sūtra* p. 58 の中 *nijjāna* (M. V. 4960) を相當せしめてゐるが、法住智とは瑜伽論卷一〇(大正・三〇・三二七下)では眞實智に對する言葉であり、同論卷九四(大正・三〇・八三五下)では涅槃智に對する言葉である。相應部、第一二、第七〇須尸摩(*Susima*)經(Vol. II. pp. 119—128)(雜阿・一四・大正・二・三四七經參照)に慧解脱者は法住智(*dhammāpattiñāna*)を得てゐるが、涅槃智(*nibbāna ñāna*)を得てゐないと説くことによつて原語を知るべきである。

- ③ 解説第百二十五函七九表、着疏も亦その意を見ることが出来る。

- ④ 結城令聞著、唯識思想史一五六頁

- ⑤ 解説第百二十函八一表

- ⑥ 測疏、(續藏・三四・四・三六四右下)

- ⑦ 講讚、日本大藏經・方等部六・一〇九頁

- ⑧ 解深蜜經卷一(大正・一六・六八九上)

- ⑨ 解説第百二十函一〇六裏

- ⑩ 佐々木月樵著、攝大乘論一二頁

- ⑪ 四十華嚴經、卷九(大正・一〇・七〇四中下)、但し八十華嚴卷六五(大正・一〇・三五〇中)、六十華嚴卷四八(大正・九・七〇四中)及び梵本等にはこの經文に相當するものを缺く。

第三節 一切法相品の構想

諸法なる依他の事體(*vastu*)を一切種子心識として説述したが、これよりその様態を顯說せんとするのである。

本品の教説の内容は科判^①によつて示すが如くであるが、前品の如く「如三世尊說_二於諸法相_一善巧菩薩」と阿含を提示し、「齊_レ何名爲_下於諸法相_一善巧菩薩_上。如來齊_レ何施設彼爲_下於諸法相_一善巧菩薩_上」と二問を設けてゐるのである。

その第一問は聖教、即ち聞相による徧如、第二問は覺慧即ち修相による徧知等二問によつて諸法相に對する善

巧なる教示を要請してゐるのである。それ故に科文によつて示せば六利樂の前四利樂は前問の答であり、後二利樂は後問の答に屬するものであつて、二大段に分つことが出来る。

先づ第一大段に於ては、聖教と覺慧との二問の答として、諸法の相とは略して三種あり、何等を三と爲す、一は偏計所執相、二は依他起相、三は圓成實相なりと説き、ついで四種の利樂によつて聞相よりする諸法相の徧知を説いてゐる。

第一に對治利樂の教説を挙げ、其等の中依他相の教説を中心として、從來それが如何に解釋されて來たか、經の當相として如何に説明すべきであるかを研尋することゝしよう。

一 對治利樂(四)――

一、無の義に於ける癡妄――云何諸法徧計所執相謂一切法名假安立自性差別乃至爲令隨起言説――

二、有の義に於ける癡妄――云何諸法依他起相謂一切法緣生自性則此有故彼有

此生故彼生

三、雜染に於ける癡妄――謂無明緣行乃至招集純大

苦蘊

四、清淨に於ける癡妄――云何諸法圓成實相謂一切

法平等眞如

此等の教説は衆生が諸法の無の義・有の義・雜染の義及び清淨の義とについて癡妄であるが爲に、其等を對治せんとして三相の説が教示せられるのである。

此等の中、有の義に於ける癡妄を對治する教説を見るに、それは阿含經以來説かれるものと文相同様であつて發展的開示がないのである。これが爲に從來、學者は解深密經に於て「影像門の唯識に對する緣起門の唯識の地位が極めて不明瞭であり、薄弱であり、問題視されなかつた云々」といひ、或は「解深密教は一般的にいへば寄木細工的に諸説を有し其間を一貫する組織的連絡を缺いて居るが阿賴耶識緣起の簡單な説と瑜伽實修より來る萬法唯識の説とを有する點が注意すべきものである。此兩説も此經に於ては内部的の關聯を有しない。」^③とも言はれるのであるが、果して此等の批評は妥當であるであらう

か。

此等の對治利樂の全文に亘りての解釋が爲さるべきであるが、それが本論の目的ではないのであり、後に關説もされるものがあるであらうから、こゝでは、前述の批評と關係する依他起相の經文について論述しよう。

先づ、測疏^④に於ては、一切法緣生自性といふを總相出體とし、則此の下を指事別釋として前二句の差別並に無明緣行の第三句について各經論共許の解釋を爲し、終りに攝大乘論に身識等十一識によつて依他起相を説くものを擧げて本經の説明にあてゝゐる。

次に、講讃^⑤に於ては次の如く説く。

- 一、云何諸法依他起相、謂一切法緣生自性
- 二依他起相、二初示緣起體、二示緣生相、今初也、即束分別自性緣起分別愛非愛緣起

二、則此有故彼有、此生故彼生、謂無明緣行乃至招引
集純大菩薩

二示緣生相、自性緣起必由愛非愛緣起、愛非愛緣起必依自性緣起、即三種種子功能互有壞長也、雜

集四(大正・三一・七一)中此有故彼有等釋、

この解釋に見るが如く、依他起相を分別自性緣起と分別愛非愛緣起との二種緣起を以て説示してゐる。徳龍は心意識相品の條下の初に於ても、流轉生死は根本識を以て緣起の源となし、その緣起は二種として次の如く説明してゐる。

緣起有二、一分別自性緣起、謂依阿頼耶識諸法生起、二分別愛非愛緣起、无明行識等十二緣起生、依福非福等緣一生愛非愛果也斯二種緣起橫豎差別互相具足、爾愚自性緣起故外道等或宿作爲因或自在天爲因或實我爲因、愚愛非愛緣起故或我爲作者或我爲受者

この解釋に於て見るが如く、徳龍にありては前後の經文を有機的關聯の下に考察してゐることを知ることが出来るのである。無着の攝大乘論に於ける此等二種緣起は解深密經の緣起説を的示したものであらうが、それを以て本經の緣起説を説示することは妥當であると考へる。

然し、解深密經の解釋を攝大乘論によりて説明するよりも、解深密經の教説は其等相ひ關聯する各品の言説によりて解明することがより剴切であると考へる。既に、

心意識相品に於て、その自性を一切種子心識なる阿頼耶識と轉識と色根との相依に於て語られてゐるのであるから、この依他起相の此れ有るが或に彼れ有りと亦、其等の相關々係に於て説かるべきであらう。解説は次の如く解釋してゐる。

一、一切法の縁生自性(dharmā jān pratyasamutpāda eva)とは、外内の事の自性にして他の縁に依る一切の縁起なり。

二、此れ有るが故に彼れ有り(asmin satidam bhavati)とは、心心所と根と境と識等が一時に生ずる縁起にして、諸の因果平等頭について説くものなり。

三、此れ生ずるが故に彼れ生ず(asvotpāda idam utpadyate)とは、種子と芽等が前後〔異〕時に生ずる縁起にして、諸の因前果後について説くものなり。

四、無明に縁つて行あり、乃至大苦蘊を招集す(avidyāpratyaṅgāṁ saṃskāra ityādi yāvad evam asya kevalasya mahato duḥkhaśāntasamutpādo bhavati)とは、此等によつて、縁起に隨順して攝せられる煩惱〔業・生〕分と相應する依他相であり、而も事の自性

なる他に依る縁起なるものなり。^⑦

此等の解釋の中、一は縁起の體を示し、二等は縁生の相を示すものであることは各疏同じい。

縁生の相を示すについて、此れ有るが故に彼れ有り、此れ生ずるが故に彼れ生ずとは、解説^⑧が示すが如く、pratyasamutpāda(縁起)なる語の訓詞相といはるゝが如く、前句は pratyā、後句は samutpāda の語釋と見るべきやうである。而してそれが即ち無明等の十二支縁生に外ならないと見るべきであるから、其等の句を一向に別異して見ることは原初の意義でなく、後世縁起の意義を考察して得られたものであらう。

今、この意義に於て解説の二を中心として考察しよう既に心意識相品に於て、依他の事が一切種子心としての示され、その自性が阿頼耶識と轉識と及び色根との相依に於て顯はに語られたことである。こゝでは再轉してその相が明示せられる次第となつてゐる。此れといひ彼れと言ふは正しく藏傳解深密經解説の解釋の如くであらねばならない。阿頼耶識といふ虚妄分別なる三界の心心所は色根と俱に安危を同じくして住するのであるから、こ

ゝに、根と境と識とが相依・相資の平等頭の同時態に於て觸が生じ、以て受等緣起して大苦蘊を成じ憂悲愁惱の現實態を見るのである。

かくの如く、依他なる諸法の有り方はかゝる方規によりて法として住するものであることを知ることによつて、諸法の有の義の癡妄を對治することが出来るのである。

以上の如く説明することによつてこそ、攝大乘論が引用せらるゝことなくして、しかもより善く經典の當意と契應すると考へるものである。その緣起の相狀の説示は阿含經典已來のストック・フレーズ(stock phrase)ではあるが、解深密經に於てはかゝる意義を以てゐるのであるから文言に囚はれてはならない。

例へば、阿彌陀經に五根が語らるれば、その五根の名目が原始經典のそれであるが爲に文言に囚はれて、原始經典に於ける位態に於て解釋をしがちであるが、一は釋迦佛なる生身佛、他は現在西方に說法します阿彌陀佛なる報身佛(misyaṇḍa-kāya-buddha)に對する信等の五根であるから、その意義の懸隔すること雲泥の差あると

同様である。

因に、對治利樂の教説に於て、遍計・依他・圓成の各相の説相は諸經より引出して要約せられたものであらうが、こゝに注意せられることがある。それは勝義諦相不可言無二品に於て、三相の説示は未だ三相としての名義もなく本品の隱説としての使命を持つものに過ぎなかつた。而してその説示は着疏によれば覺證の教示であつた。然るに一切法相品にありては此等の三相の教説を以て聖教(sāma)よりする説であるとして、三相説を以て聖教的位置を與へてゐるのである。これは、勝義諦説を以て近來のある學者によつて一經として獨立的發展を遂けてゐるものであるともせられてゐるが、この三相の伏線的説示よりして三相を聖教説として舉體開出し來る所に文相拘鎖し義相も亦前述の如く連環し、以て一切法相品が即ち解深密經が説かれねばならない史的意義があると考へられるのである。

一切法相品に於ては、かくの如く偏計・依他・圓成の三相を聖教説の位置を與へ、その法説に對して、第二には譬喩利樂として喩説を説述するのである。

第三成就利樂とは、三解脱門を引發し成就せんがためにそれと相應する三相の教説を説示するものである。教説を擧げて略解することゝしよう。

一、如是徳本、如彼清淨頗胝迦上所有染色相應依他起相上徧計所執相言説習氣當知亦爾。

二、如彼清淨頗胝迦上所有帝青・大青・琥珀・末羅羯多金等邪執、依他起相上徧計所執相執當知亦爾。

(大正・一六・六九三中)

第一文によつて無始の時より來、事(vastu)に執着する習氣が我々の心を迷はしむる因であり、阿頼耶識の中に偈來的(客)に住することを説き、第二文によつて、依他相上に於ける徧計の名(帝青等)を實有として執する虚妄の徧計を説くのである。

此等の習氣と名との二は徧計の相であり、それは迷の因と迷の自性ではあるが、其等は外(色法)内(心法)の事(vastu)の自體ではなく客なるものに過ぎないものである。つて、其等の相無自性であるから空と開示されるものである。かくして空解脱門が引發せられ成就するのである。

如彼清淨頗胝迦寶依他起相當知亦爾

依他は分別の行境(vikalpa-gocara)、即ち徧計相の相(kun-btags-pahi mshan-nid kyi mshan-na)であり、物

體を擧ぐれば三界の心心所にして苦の自性なるものである。心心所は苦の自體であるが、諸法の有爲相に對して苦なりとの價值あらしめるものは無始以來の徧計の仕業であつてそれは恰も清淨なる頗胝迦の上に帝青等邪執するが如くである。三界の生死はかくの如く心心所なる苦の自體なるものと開示せられるから、そこに無願解脱門が引發せられ成就するのである。

如_下彼清淨頗胝迦上所有帝青大青琥珀末羅羯多眞金等於_下常々時_二於_二恒恒時_一無_レ有_二眞實_一無自性性、即依他起相上、由_二徧計所執相_一於_二常常時_一於_二恒恒時_一無_レ有_二眞實_一無自性性、圓成實相當知亦爾。

かの清淨なる頗胝迦の上に顯現したる大青・眞金等は青染色・黃染色等と合して似現してゐるものであつて常恒に互りて無自性性なるものであるが如く、依他起相の上に於ける徧計相の行相は習氣といふ無始以來の迷因の染色と合する時に似現するものであるから、其等の一切

相は除遣せらるべきものである。圓成實相は實にかゝる
 徧計相の行相がそこにこそ成就せざるものと開示せら
 れ、無相解脫門が引發せられ成就するのである。

以上は空・無相・無願の三解脫門といふ聖教(keama)^⑨
 を成就する三相の教示なのである。

第四方便利樂とは、相・名・分別・正智・如如等の五
 事に依つて知らるべき方便の義と相應する三法相の教説
 を説示するものである。先づ、教説を挙げ、それより略
 解しよう。

復次徳本相名相應以爲緣故徧計所執相而可了知

(大正・一六・六九三中)

扱て、三惟門の唯識が大乗阿毘達磨經より系統するも
 のであつて影像門の唯識義への過程が本經に於て不明瞭
 であるといふ人々に對して、しかく言ふことが妥當であ
 るか否かの解答としてこの教説は重要であると考へるか
 ら少しく論述しよう。

相(mūṣan-ma, nimitta)とは、分別の行境、徧計相の
 所依(gaṇa)なる行相にして依他の相なり。

名(nāma, nāman)とは、その相の上に言説を隨起する

が故に自性と差別とに於て名と假(bṛā, saṅketa 標
 示)とを安立する。それが徧計の相なり。^⑩

この解説の解釋に於て見るが如く、相とは依他相をい
 ふものであり、名は徧計相をいふものであるが、所依無
 くしては名を施設する方便なく、徧計の名は依他の相と
 隨應することを縁として、そこに、徧計所執相が了知せ
 られるのである。これが、五事の中、相と名とに依つて
 知らるべき方便利樂と相應する徧計相を了知すと説くの
 である。

依他起相上徧計所執相執以爲緣故依他起相而可了知、

依他起相の上に徧計の名を分別することによつて執着

(mūṣan-par-śeṇ-pa) するのは虛妄分別なる三界の心心

所である。この諸法の相の上に名を分別して執着するか
 ぎり依他相があるのであるからその執着によつて依他相
 を了知すべきである。これが分別によつて知らるべき方
 便利樂と相應する依他相と説くのである。

依他起相上徧計所執相無執以爲緣故、圓成實相而可了知、

了知、

依他起相の上に徧計所執の名に執着することゝならな

いのは轉依によつて攝せられる智が眞如の清淨なる行境と相應するからである。かくの如く依他相上に徧計の名に於て正智の無執を縁とする時に圓成實相が顯現するのである。これが正智と眞如とによつて知らるべき方便利樂と相應する圓成相と説くものである。

此等の所述の中、依他の相に於て、分別の行境、徧計相の所依 (ācraṇa, gnaś) なる行相と説かれるが、その行相 (īdu-byed kyi mshan-ma, saṃskāra-nimitta) とは、依他の自體が虛妄分別なる三界の心心所であるのであるからそれは了別 (vināpū) より外ではないのである。而してその三界の心心所とは阿賴耶識と轉識等であるから一切の色境は色識 (rupavināpū) であり、心識も亦識識 (sīnanavināpū) として行相を顯現するものであり、その行相は唯識 (vijñapimātra) であるのである。この vināpū の語はかくの如き理趣よりして相識と和譯することが、その性格と相應するであらうか。

かくの如く見る時、この相・名・分別・正智・如如の五事と三法相と相應して解釋せる時にありては三性門の唯識が構想せられてゐたことは認容しなくてはならな

い。然し、それが明にせられて來たのは大乘阿毘達磨經の思想にも依り、特に攝大乘論に於て展開して來たものではあるが、解深密經に於ても亦影像門の唯識の存在するのは、決して前後の意義に於て連環性なくして存在するのではなく自然 (svayambhū) 開示して顯説されてゐるのである。

以上、對治・譬喩・引發・方便の四利樂法門は聖教 (āgama)、即ち聞相よりする三法相の徧知である。この中、方便の相等の五事の説かゝるのは楞伽經であるのであるが、本經の成立と關係する所あるであらうか。

次に、これより覺證、即ち修相よりする三法相の教示であつて、この二利樂を了知することによつて始めて諸法相に善巧なる菩薩といはるゝのであると説く。

こゝでは、本經の説述については専ら略述すべきであるのであるが、勝義諦不可言無二品に於て三相が隱説せられ、その依他なる事體を心意識相品に顯説し、ついで一切法相品に於て三法相説として廣説せられてゐることによつて各品鈎鎖せることを知つた如く、修相の二利樂によつても亦解深密經の成立構造を論ずる目的と合一す

るものがあるので、これより更に論述を進めよう。

第五覺慧利樂とは、一切の所知事である無相法と雜染相法と清淨相法を覺りつゝ、その覺の果である利益の利樂(phan-yon gri dgeos-pa)を得、善巧の施設となる利益の義と相應する三法相の説をいふものである。

善男子、若諸菩薩、能於諸法依他起相上、如實了知偏計所執相、即能如實方知一切無相之法、(大正・一六・六九三下)

諸法の依他起相即ちそれは偏計相の所依である行相に因つて言説を隨起し、諸法の自性を色・受・想・行・識等と説き、其等五蘊の一々に差別を安立するのであるが、其等は事に對して偶來的(客)なるものであると知り、其等の相は無自性であり、隨つて空華の如く二諦に於て畢竟して無なるものであると證るのである。

若諸菩薩如實了知依他起相、即能如實了知一切雜染相・法、

依他起相とは、諸法の行相に於て偏計相に執着する虛妄分別なる三界の心心所と如實に知り、それは流轉緣起と隨順するよりして、煩惱と業と生との雜染と相應する

ものである。その虛妄分別は他緣なくして生ずるものではないから生無自性であり、恰も幻の如く、俗諦に於ては有るが變異し無常であるから苦と覺るべきものである。

若諸菩薩如實了知圓成相、即能如實了知一切清淨相諸法の行相上に於ける偏計相に執着することなくして正智が眞如の境と相應すと知り、その圓成相は流轉緣起と隨順することなくして般若等の菩提分と相應する一切法及び十力等の廣大の功德の一切の因となるものである。それは勝義無自性にして虚空の如く勝義諦に於てありと知り、一切の解脫・安樂を證るのである。

以上が覺慧利樂の經説の略解であるが、その依他起相に於て煩惱・生・業の雜染相法として説き出されて來る所に佛教は智的・了解に終るものでなくして修相としての行的實修に身證を要請するものである。この雜染の所依(atāra)の轉滅のために瑜伽の觀法と十地及び波羅蜜の修行が負荷されるのである。分別瑜伽品・地波羅蜜品の廣説せられる所以であると考へる。

第六功德利樂とは、諸法の一切所知事を現覺し、その果なる一切種智(nan-par thams-cad khyen-pa nid)を得

つゝ善巧の施設となる利益の義と相應する三法相の教説をいふものである。その一切種智とは果の所依であつて斷圓滿と智圓滿とによつて開示せられる。

善男子、若菩薩衆於依他起相上如實了知無相、即能斷滅雜染相法、(大正・一六・六九三下)

依他の行相の上に偏計の相である名と假とによつて住する相を自體相によつて住すること無き無相法である^⑩と知り、かくして菩薩は實我・實法と執じ・雜染性である虚妄なる分別を斷滅することが出来るのである。雜染を斷除するのであるから、こゝに斷圓滿の果を得るのである。

若能斷滅雜染相法、即能證得清淨相法

若し雜染相法である虚妄なる分別を轉依するならば、その轉依によつて攝せられる清淨相法なる正智を得るのである。この正智が智圓滿であるといふ義である。

以上が功德利樂と相應する三法相の教説の意義であるが、この斷果と智果との一切種智の證得なくしては覺慧即ち修相に於て三法相の説に眞に善巧であるとは言ひ得ないのである。

この功德利樂の教説はこれだけではその意義を密にすること出来ないから如來成所作事品が開顯せられるのであると考へる。

終りに、かくの如き偏計所執相 (parikalpita-lakṣaṇa)

依他起相 (paratantra-lakṣaṇa)・圓成實相 (pariṣpanna-lakṣaṇa)の三相 (tri-lakṣaṇāni) 説の構想についての據處について、ラモートは解深密經の序文にオバーミラー (E. Obermiller) が二萬五千頌般若 (pañcaviṃśati-sāhasi-kaprajñāparamita-sūtra) の中に三性説に等同せらるべきものあることを注意してゐると示し、次いで同様の説が無性釋、攝大乘論 (大正・三一・三九九中) 引用の波羅蜜多經にあることを指摘してゐる。それによると色等の五蘊乃至一切佛法について、遍計所執色 (parikalpita-rūpa)・分別色 (vikalpa-rūpa)・法性色 (dharmata-rūpa) 等三相を分別するが、次第の如く、遍計所執相・依他起相・圓成實相等に相應するものである。オバーミラーの二萬五千頌般若の「彌勒の請問」章中に、遍・依・圓の三性に等同せらるべき三相とは、計所執 (kalpita)・所分別 (vikalpita)・法性 (dharmata) であるといはれる^⑪。

更に、三性及び三無性の教説は賢首の探玄記によると華嚴經離世間品の教説中に見出さるゝことを報じてゐる。そこには、三性及び三無性に等同せらるべき名目が説示せられてゐるのではないが、菩薩の諸法の觀方に差別あることを判別してゐる着想は領受せらるべきである。と考へるから、經文と會合して引用することゝしよう。

佛子菩薩摩訶薩、有二十種力、所謂、深入一切法力、

〔一〕解一切法猶如幻力、〔二〕解一切法如幻力、〔三〕

令一切法入佛法力、〔四〕於一切法無染著力、

……六十華嚴(大正・九・六三五下)

〔釋曰〕初一總、餘九別、別中初二解依他性如幻化、三解圓成性、四解所執性即空故無染也。探玄記卷一七(大正・三五・四二五上)

この解釋と般若經の教説とを觀待し、更に解深密經成立構造に關しての華嚴經と般若經との位置を考慮する時、人あつて「二萬五千頌般若の「彌勒の請問」なる一章は、般若經が解深密經と同じき意趣の上に置かれんとした般若の歴史的進展による加上である。」^⑮と見るよりも般若經・華嚴經等に於ける其等の教説の了義的創唱を解深

密經が果遂してゐるものであると見るべきでないであらうか。

註① 科判細科、第六品

② 結城令開著、唯識思想史、二九九頁、又「解深密經の心意識義は分別瑜伽品の實踐に由つて本當な意味での唯識學に深たられたと云ひ得る(二九五頁)等

③ 宇井伯壽著、印度哲學史二九四頁

④ 測疏卷四(續藏・三四・四・三七二下)

⑤ 講讀卷四(日藏・六・一二五下)

⑥ 右同、(一〇九上)

⑦ 解說第二百二十五函・一二三裏―一二四表

⑧ 解說、第二百二十六函、九二裏

⑨ 佛母出生般若經、隨知品二九、一切法空無相無願、當知般若波羅蜜多亦如是(大正・八・六六七中)小品般若經隨知品二六、一切法空無相無作(大正・八・五七九下)

⑩ 解說、第一二五函・一一八裏

mtshan-ma ni rnam-par-tog-paḥi spyod-yul kun-brtags-
paḥi mtshan-ñid kyī gnas hdu-byed kyī mtshan-ma ste/
gshan gi dbeñ gi mtshan-ñid yin-no/
/min ni mtshan-de la ji-tsam-du rjes-sa-tha-sñad gñe-
ag-paḥi phyir ho-bo-ñid dan bye-brag tu min dan brdar
rnam-par-bshag-pa ste/ kun-brtags-paḥi mtshan-ñid yin
ste/

自性とは、これは色なり、これは受なり等と自性を安立

すること(解説・一一一裏)

差別とは、この色は有漏なり、この色は無漏なり等と差別して安立すること(右同・一二二表)

假とは、言説(tha-shad)を解らしむる因にして、こゝに住せよ、かしこに云れ、爲せよ、爲され等の如き言説句(tha-shad using)とか、印契(lag-bzda, mudra)とか、眼くばせ(Mig-zur, latäksa)によつて覺らしむること(右同・一二二裏)

⑪ Saṅghinimocana-sūtra, p. 14.

⑫ 山口益著、無と有との對論 一五二頁

⑬ 同右、一五二頁

第四節 無自性相品の構想

無自性相の教起因縁は勝義生菩薩が如來に、世尊が諸蘊の自相・生相・滅相・永斷・徧知等と有自相的に説く教説と、一切諸法の皆無自性・無生・無滅・本來寂靜・自性涅槃等と無自性的に説く教説と二様を説示し給ふが、その無自性と説かれる密意について問ひ奉ることより開出せられるのである。これ解説科判にては三大段に分れ、その第三段、了義の廣大教説の下に、初・昔と判教せられる教説を擧げてゐるものである。

この無自性品の來意については德龍は左の如く説述し

てゐる。

來意者有_レ二、初近由、二遠由、

〔一〕近由者、斯品近承_二前一切法相品、明_二前品三自性法畢、今爲_レ明_二三无自性法_一故此品來、斯次第三十頌明_二三性_一已、云_二即依_二此三性_一立_二彼三无性_一、云_二之自性无性前後次第_一。故即佛密意說一切法无性者述_下於_二今經_一決擇第二時空法門_二也_一。

〔次〕遠由者、境四品中、前三品明_二所詮法_一已、今爲_レ決擇能詮教_二故此品來_一。②

この二由の中、測疏も亦第一由を以て次第を説いてゐるが、着疏も亦次の如く述べる。

第七〔品〕に於ては、義に於て四種の邪解の對治は三無自性の教説なり。此を説示せば、無自性の秘密教説に於て義を邪解する四種によつて失壞するなり。その對治の爲に此〔三無自性〕を説くものなり。

これによつて本品の來意については、支那傳と西藏傳と同じものであり、三十頌に於て「即依_二此三性_一立_二彼三无性_一」といふは、着疏の四義の中第一義に據るものであつて傳承の懸_{はる}かなるを思ふべきである。

扱て、本品三大段の中、第一大段は無自性意趣教説であつて、それは四義を攝め、第一義は無依止の邪思惟を對治すと科せられるものであるが、經説は次の如く説き出されてゐる。

勝義生、當知我依三種無自性性・密意說言、一切諸法皆無自性、所謂相無自性性、生無自性性、勝義無自性性

(大正・一六・六九四上)

その無依止の邪思惟とは、世尊が一切法は無自性なりと説きたまふは、三自性なる徧計自性・依他自性・圓成自性等に依つて説くものであるから依止(*agrāya*)あるものである。その理趣を知らずして三自性に依止することなく説くものであると思惟するのが無依止の邪思惟といふのである。

この對治のために三自性、即ち遍・依・圓を依止として、相無自性性・生無自性性・勝義無自性性の三種に因つて、一切法は無自性なりと説くといふのである。

第二義は無密意の邪思惟を對治する教説であるが、その無密意の邪思惟とは三無自性の密意を捨離するといふ。世尊が一切法は無自性なりと説くは、一向に無自性

なりといふ意味で説くのではなく、相・生・勝義の三無自性よりして無自性なりと説くといふのである。

第三義は無義の邪思惟を對治する教説であるが、その無義の邪思惟とは義あるを失壞するからである。義とは、無増益と無損減との義であつて、世尊の一切法は無自性なりと説くは、この義あつて説かれるのであるが、その意義を見ることなく捨離するからこの一段の教説があるのである。

佛教の教理は諸法を有と増益することなく、無と損減することなく中道を宣説するといふことは一貫せる思想なのである。今、一切法は無自性なりの意義を説く三無自性の説も亦この義を顯示してゐるのである。即ち、徧計相の相無自性なるは空華の如く二諦に於て畢竟して無であるから無増益の義と相應し、依他相の生無自性なるは幻像の如く世俗諦としてあり、圓成相の勝義無自性なるは虛空の如く勝義諦としてあるから此等の依他・圓成の二面よりして無損減の義と相應するものである。かくの如く無増益と無損減との義によつて諸法の中道が顯現するのである。

第四義は無觀待の邪思惟を對治する教説であるが、無觀待の邪思惟とは、世尊が一切法は無生なり、無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと説かれるのは其等の四句を前後に觀待して説かれるものであつて、それを了知しないのをいふのである。それを對治せんが爲にこの一段の教説があるのである。

即ち、世尊が一切法は無生なり、無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと説くは、相無自性より密意して説くものである。それは、自相無きものは無生なり、無生なるものは無滅なり、無生・無滅なるものは本來寂靜なり、本來寂靜なるものは自性涅槃なりと説くものである。

又、それは勝義無自性は法無我によつて顯はさるゝ上より密意しても亦説くものである。法無我なるものは無爲であり、一切の雜染より離れたものである。無爲であるから無生・無滅であり、一切の雜染を離れてゐるから、本來寂靜であり、自性涅槃なのであると説くのである。かくの如く、前後觀待して四經句が説かれてゐるものであることを知らなくてはならない。

こゝに、勝義生菩薩は「一切法皆無自性、無生無滅、本來寂靜、自性涅槃」と一聯の句を提けてその密意を問ふに對して、經説では、無自性の密意を三義により、不生不滅本來寂靜・自性涅槃の密意を一義によつて説いてゐるのであるが、此等の經句は、いはゆる「世尊在昔第二時」を以て、測疏以來諸部の般若としてゐるより般若の經句とせられてゐるやうである。

小品般若、隨知品には、

一切法無相當知般若波羅亦如是、一切法本來清淨……

一切法如涅槃……一切法不來不去無所生……。捨二

切檐⑤當知知般若波羅蜜亦如是、何以故色無形無處、

自性無故

とあり、又、大般若經、卷五七一には、

不生不滅、本性寂靜(大正・七・九五一中)

等に其等に相當する經句が見出され、傳承の如く諸部般若の空教が攝在せられるのであらう。

然し又、十地經卷四には、

觀法無相無自性、無起無生常寂靜、性本清淨無戲論⑥

とあつて、それに相當する一聯の經句を見出すのであ

る。解深密經の成立構造より言つて本品も亦關係ありと見てよいものと考へられるから「在者第二時」は諸部般若と共に華嚴經をも純攝してゐるものと考ふべきである。

次に第二段は行人差別敎説といはれ、徧・依・圓の三自性は三無自性より別異して有るものでないのであるが、諸の衆生の中にはそれを覺らずして自性に執着し、雜染分と相應し成就する者と、その別異を見ずして清淨分と相應し成就する者との修行人の差別を廣く説いてゐる。

第三段は廣大敎説とて、三自性及び三無自性敎説の無上無高の眞實了義にして廣大なる敎説であることを四相によつて説いてゐるのである。

終りに、三無自性説の據所であるが、前節に探玄によつて三性説のそれを經と會合して引用したから、こゝでは三無性説のそれを紹介して置くこととする。

佛子菩薩摩訶薩有十種修道、何等爲十。

〔一〕不著不出修、身口意無忘失故、〔二〕無増減修、知諸法眞實故、〔三〕非有非無修、入非有非無性故

〔四〕如夢、如電、如響、如鏡中像、如熱時焰、如

水月、修、於一切法無所著故、六十華嚴(大正・九・六五五下)

〔釋曰〕初三別約三無性修、一者無相觀中不見所執染法可著、亦不見淨法可依出離、由此能令三業無失。二於無二觀中不見染分可減淨分可増、以無生理實故、三於無性性觀中不見前二性爲有、不見三無爲無、又眞如相非有體非無、上約正證智。四約後得智中別就依他性以成修行觀唯識如幻等一成不顛倒行。探玄記卷一七(大正・三五・四三三中)

註① 附錄科判第七品

- ② 講讚卷五(目藏・六・一三一下)
- ③ 測疏卷四(續藏・三四・四三七九左上)
- ④ 測疏卷五(續藏・三四・五・四一二右上)
- ⑤ 小品般若經、隨知品第二六(大正・八・五七九中)
- ⑥ 佛母出生般若經、隨知品第二九(大正・八・六六七上)
- ⑦ 十地經卷四(大正・一〇・五五五上)、又同卷(大正・一〇・五五二下)